

中学校国語科におけるNIE・学校図書館活用の授業実践

北海道教育大学 瀬川 良明
札幌市立月寒中学校 三上 久代

segawa@sap.hokkyodai.ac.jp

1. はじめに

「伝え合う」というキーワードに注目したい。プレゼンテーションは、今や学校教育では必須のスキルであるが、中には「発表すること」自体が目的化し、「伝え合う」という基本的なコミュニケーションが成立していない事例が見受けられる。

プレゼンテーションをメディアリテラシーのカリキュラムで学習する外国の事例もあるが、日本の場合、国語の3領域と関連づけて学習するのが合理的であろう。国語では「伝え合う内容にいろいろな形があることを理解する」ことに重点をおくのに対し、情報教育では「調べること、まとめ方、いかに伝え合うか」に重点があると言えよう。国語的な部分と情報教育的な部分とを交差させる学習活動が、より確かな「情報活用の実践力」につながると考える。

「情報活用の実践力」は、個人の学習活動だけではなく、他者との関係である社会性を重視している。国語の題材としては「スピーチ」、「インタビュー」や「プレゼンテーション」などがある。ICT（情報通信技術）に象徴される多様な情報メディアに対応した「伝え合う」ための基本的なコミュニケーションスキル、リテラシーの育成が必要な所以である。

とは言え、現状ではICTの活用以前の事例も少なくない。これまでの流れをみると、情報教育の関係者は教科の国語に、国語の先生は情報教育に対してそれぞれ遠慮しがちであったことが反映していないだろうか。今回、このような問題意識から、NIEおよび学校図書館を活用した中学校国語科の授業を開発し試行したので、その概要、成果、課題などについて報告する。

2. 授業概要

研究校である札幌市立月寒中学校は、札幌市内中心部に比較的近い古くからの住宅地に位置する典型的な公立中学校である。1年生4クラスで授業実践を行った。

環境をとらえる国語の教科書単元「かけがえのない地球」「身近な自然とわたしたち」（教育出版）を取り上げ、環境問題をテーマにした。三上が国語の授業として前半を担当し、瀬川が情報教育担当のゲストティーチャーとして後半TT参加する授業をデザインした。その特徴は次の2つである。

第1に情報活用の実践力としてのメディアリテラシーに注目し、NIE（教育に新聞を）の実践として新聞、新聞記事データベースを活用したことと、学校図書館を学習情報センターとして活用したことである。

第2に情報活用の実践力としてのプレゼンテーションに注目し、その基本となるポスター発表と評価をTTで行ったことである。発表の交流では、班ごとにポスター発表を行い、班代表を選んだ。クラス発表として班代表の発表を行い、その様子をビデオ撮影し、録画ビデオの視聴をとおして発表のリフレクションを全クラスで行った。授業の全体計画（全12時間）を示す。

	授業内容	備考
1	全文通読、難語句の解消	教科書
2	漢字練習	プリント
3	内容読み取り	教科書
4	調べ方とテーマの決定	補助教材
5	新聞記事の読み方	NIE
6	学校図書館資料で調べる	寄託図書
7	図書以外の資料で調べる	新聞記事DB
8	資料の作成	
9	発表の方法	
10	発表の交流（ビデオ撮影）	相互評価
11	ビデオによる振り返り	自己評価
12	まとめ	事後調査

前半の授業1～8までを1学期末に行い、夏休み課題としてポスター作成を課した。その上で2学期明けに後半の9～12（TTは9～11）の授業を行った。

2.1 NIE

NIEの授業実践としての位置づけは、サブメントの利用（教材用に特別編集された紙面）新聞の読み方の指導（見出し、リード）新聞記事と新聞記事データベースの比較の3点である。

サブメントとして、環境問題を考える特集号（読売新聞社）を使用した。なお、月寒中学校は2004年度NIE実践の認定校であり、三上はNIEアドバイザー（日本新聞教育文化財団）でもある。

2.2 学習情報センターとしての学校図書館

学校図書館が所蔵する環境問題に関する情報源には、官公庁のパンフレットなど図書以外にも活用できるものもあったが、それだけでは不十分であり、札幌市独自の学校図書館サービスである寄託図書として、図鑑など8タイトル約70冊を活用した。

学習情報センターとしての活用ではメディアリテラシーを意識し、2つ以上の複数の資料を使うことと、資料の出典の記入をすることを必須とした。

補助教材として、『中・高生のための学校図書館利用テキスト』（谷口・新田・三上、2004）を使用した。

3. 授業実践

3.1 ポスター課題

4クラス、143人分の様々なポスター課題が集まった。それらを内容で分類すると、地球規模の環境問題(二酸化炭素、熱帯雨林、地球温暖化、森林破壊、オゾン層破壊、化石燃料、原子力・放射線)(40.6%) 都市化と身近な自然(動植物、大気汚染、ゴミとリサイクル、里山)(27.3%) 自然環境(台風、地震、火山)(12.6%) 生物全般(19.5%)になった。

学習をとおして、生徒が環境問題について、どのようなトピックに興味関心を持ったかを垣間見ることができた。北海道ではあまり馴染みのない「里山」(5.6%)が選ばれた理由は、単元「身近な自然とわたしたち」の小見出し「里山を歩く」による。

一方、ポスターの表現方法は、文字のみ(62.5%) イラスト、グラフ、写真を使用(35.5%) 実物を張り付ける(2.0%)であった。

3.2 ポスター発表と相互評価

班ごとで順番に自分の調べた事項についてポスターを使って発表した。評価項目は、伝えたいという意欲が感じられたか、話す声の大きさ、はやさ、言葉の調子、問のとり方、説明は筋がとっていて、わかりやすかったか、資料は2つ以上のものを使って調べてあり、出典の記入があるか、資料の見出しの言葉に工夫があり、字の大きさや形に変化があったかである。それぞれ3段階で評価するとともに、「良かった点、私ならこうしたい」を自由記述させた。

ポスター発表の評価では、イラストの使い方やレイアウトの工夫に関して、生徒と教師の評価がほぼ一致したが、教師は、生徒が自分の考えを主張しているかどうかをより高く評価した点が異なる。

「伝え合う」というキーワードをとおした、ポスター発表の問題点を明確にすることができた。

3.3 ビデオによるリフレクション

今回、情報の交流として、前の時間に撮影したビデオを視聴し、ポスター発表のリフレクションを行った。なお、ビデオは4クラスの班代表各6~7人の発表を約20分に簡易編集したものである。

自分と他クラスの発表をビデオで視聴した後に、自分の発表の良かった点、改善すべき点について、感想などを自己評価カードに記述させた。

それぞれのレベルに応じたポスター発表に初めて挑戦し、満足したり、後悔したりしたことに加え、普通の授業では他のクラスの授業風景を見ることはないの、そのこと自体が生徒にとって興味を引く授業であったことなどを、評価カードから読み取ることができた。

3.4 授業評価

今回の授業が、どのような学習効果をあげたのか。5肢選択式のアンケート調査を実施した。集計結果の概要を以下に示す。

1.身の回りの自然に興味を持つようになったか	
そう思う	27.3
ややそう思う	56.6
どちらともいえない	15.4
あまりそう思わない	2.8
そう思わない	1.4
2.発表の仕方が詳しくなったか	
そう思う	16.8
ややそう思う	37.8
どちらともいえない	42.0
あまりそう思わない	8.4
そう思わない	2.8
3.他教科の学習に役立つか	
そう思う	40.6
ややそう思う	43.4
どちらともいえない	18.9
4.前問で「そう思う」と答えた人	
索引、目次の使い方に慣れた	35.7
新聞の読み方が分かった	41.3
新聞記事データベースが分かった	18.2
資料のまとめ方が分かった	53.1
人前で発表することに慣れた	22.4
発表の聞き方が分かった	35.7
調べた内容に詳しくなった	40.6

環境を題材にした国語の授業実践の結果、身の回りの自然に興味を持つようになった生徒が(83.9%)発表の仕方が詳しくなった生徒が(54.6%)他教科の学習に役立つと思った生徒が(84%)であった。

具体的なスキルでは、新聞の読み方(41.3%) 資料のまとめ方(53.1%)で効果が見られた。しかし、新聞記事データベース(18.2%) 人前で発表すること(22.4%) 発表の聞き方(35.7%)では、あまり効果が見られなかったようだ。

時間的な制約もあり、いわゆるポスターセッションをとおして、生徒自身が伝える力、まとめる力の高まりを実感できるまでの体験とすることができなかった点は今後の課題である。

4.おわりに

今回の授業は、多くの生徒にとって新鮮な体験であったことが、事後の感想文から読み取ることができた。また、波及効果として、ビデオ編集の出前講座を学校祭終了後に実施したこと、「第32回中学生作文コンテスト」(毎日新聞社・ほくでん)に生徒の作文が入賞したことをあげることができる。

今回の授業は「伝え合う」をキーワードにしたパイロット授業という位置づけであり、TTによる授業展開、ICTの活用等の問題点が明確になった。今年度は展示型ポートフォリオによるプレゼンテーションをゴールに、教育用データベースなどICTの活用を充実させた授業を展開し、「情報活用の実践力」のより一層のブラッシュアップを図りたい。